

第八回 日韓キリスト教「障害者」合同交流セミナー

基調講演「『障害者』と災害」

日本基督教団仙台北三番丁教会 担任教師
神学博士 川上直哉

川上直哉と申します。日本基督教団仙台北三番丁教会の牧師として、被災地に仕える働きを担わせていただいております。今日は、その働きの中で見えてきたことを申し上げ、第八回 日韓キリスト教「障害者」合同交流セミナーの基調講演とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

今からお話し申し上げます講演は、災害の現場において「障害」とは何かが明らかになる、その具体的な事例をご紹介します。そしてそのことから、神様が私たちと「共に」いてくださるから、神様は私たちの「ために」働いてくださる、だから私たちも同じようにしたい、ということをお願いしたいと思います。その内容は、以下のような順序で進みます。

まず最初に、この講演で何を申し上げたいか、ということ、できるだけ簡潔に、申し上げたいと思います。簡潔に、ということですから、少し抽象的に申し上げます。

それから、被災地の事柄をお話しします。具体的には、津波被災地の外国人被災者のお話と、原子力災害被災地の障害者のお話です。

最後に、少し大きな視野から問題全体を振り返り、福音の力の大きさについて申し上げて、この講演を終わりたいと思います。

以上の内容を項目として整理すれば、以下のようなになります。

序：「障害」という言葉について

1. 津波被災地の外国人
2. 原子力災害被災地の今

結：福島ろう恵み教会・東日本大震災国際会議・世界教会協議会

序：「障害」という言葉について

(1)「基調講演」として

ただいま私がお預かりしたこの時間は、「基調講演」と名付けられております。ここで私は何をすべきでしょうか。まず、「基調」ということを考えますと、ここで私は、今日・明日と持たれます合同交流セミナーの「基本的な調子」をお示しすることになります。全体の雰囲気や方向、あるいは土台となる事柄を、ここで申し上げるわけです。大変な責任です。

その責任を前に、私は、論語の一節を思い出します。「必也正名乎＝必ずやまず名をたださんか」(子路第十三)という言葉です。

「一国の宰相として迎えられたら、何をしますか」と、弟子の子路が、孔子に聞いたとき、孔子は答えて、「必ずまず、人々が曖昧に使っている言葉を正すだろう」と答えた。弟子の子路は「どうしてそんな意味のない事から始めるって言うのでしょうか。これだから先生は！」と嘆く。すると孔子は「だからお前は野蛮なのだ」と言い返す——そんなお話です。

これから持たれます豊かな交流が、いよいよ意義あるものとなるための講演を、今から申し上げます。その目的のために、私は、孔子に従って、この講演を、言葉を正確に理解しなおすことから始めたいと思います。そしてさらに、そのお話がそのまま、本日の私のお話の結論になるように、最初のお話を組み立てたいと思います。

(2)「障害」という言葉

私がここで、「正確に理解したい」と思います言葉は、「障害」という言葉です。この言葉を巡っては、もう10年以上も、議論が続いています。その論争点は、「害」という字にあります。「害」には「傷つける、じゃまする、そこなう、災いをもたらす」の意味があります。心ある人々が「これは変だ」と感じまして、調べてみましたら、実に、1945年以前の日本では、「障害」ではなく「障碍」という言葉が使われていたことがわかりました。それで、この10年来、ずっと、「障害」という言葉は不適切ではないかと、議論が沸騰しています。

今日は、「日韓」の合同交流セミナーです。「1945年」に触れるとき、私は、どうしても、韓国の皆様に、日本人として、お詫びをしなければなりません。私たちの先祖は、自分たちが欧米列強諸国に植民地化されることを恐怖するあまり、隣国を植民地としてしまう罪を犯しました。1945年より昔の日本語の世界は、韓国の皆様のご先祖様の世界でもある。ここに、日本の罪責があります。私は日本人ですから、この罪責を自分のことと認め、深く良心の痛みを覚えます。神様のゆるしを、ここで希うほかありません。

さて、1945年以前の日本語で「障碍」という言葉が使われていたことを申し上げていました。「障害」という言葉も、少し使われていたようですが、多くは「障碍」と書いたそうです。「碍」という字は、「害」と、何の関係もない言葉です。もともと「碍」という字は「礙」という字を簡略化したもので、その意味は、「人が顧みて立ちどまり、凝止する形」であるということです。

障害とか、障碍＝障礙と書きます、その際の「障」の字には、「進行を妨げる」という意味があります。ですから、こうなります。

序:「障害」という言葉について

서론:「장애」라는 언어에 대해서

After 1945

Before 1945

障害 ← 障碍 = 障礙

まず、「障害」といったときは、人生とか社会が進んでいこうとするとき、それを妨げる「何か」があって、その「何か」が、災いをもたらす、と言っていることになります。目が不自由だ、耳が不自由だ、といったときに、その不自由さが人生とか社会に「災いをもたらしている」と考える。それが、「障害」という字の意味になります。

他方で、「障碍=障礙」といったときは、どうでしょうか。その時は、人生や社会が進んで行こうとするとき、それを妨げる「何か」がある、その何かの前で、私たちは立ち止まり、それがなんであるかをじっと見つめてみる、という意味が、「障碍=障礙」の意味となります。

社会や人生が動きを止め、歩みを遅くするときがあるのです。そのことを、どう考えるか。社会や人生がどんどん前に進む、ということが、必ずしも良いこととは限りません。急ぎすぎれば、躓きます。うまくいくことで、高慢になって人品が卑しくなる、かもしれない。そうしたことを忘れて、「どんどん進まなければ」と思う気持ちが、つまり、心身の不自由などを「邪魔だ」と思う気持ちが、あるいは「障害」という字に表れているのかもしれない。

でも、実は、遅いこと、小さいこと、つまらない事、愚かしいこと、弱いこと、躓くことが、時に、とても大切な意味を持つことがある。そう思うとき、私たちは、「障碍=障礙」という字を使うことの大切さを知るのだと思います。そして、1945年以降の日本人が、つまり、敗戦の焼け野原から何とか急いで復興したいと願った日本人が、「障碍=障礙」という言葉の意味を見失っていった、と考えますと、いま私たちの周りに「障害」という字ばかりが使われるようになったこと背景が説明できるような気がしてなりません。きっと、私たちは、「障碍=障碍」という言葉を忘れてしまう中で、大切なことを見失ったのだと思います。私たちは、愚かさや躓きの中にある「本当に大切なもの」を見失ったのだと思うのです。

愚かさ、あるいは躓きの中に、本当に大切なものがある。そうはつきり見抜いた人が、新約聖書のパウロでした。パウロは、その体に治らない病を抱えていたようです。その病を、パウロは、自分が高慢にならないように神様が与えてくださった棘だ、と考えました。パウロの人生がぐんぐん進展することを、邪魔するものがある、それをパウロはじっと見た。信仰の目を通してじっと見た。「ギリシア人には愚か、ユダヤ人には躓き」と思われる十字架の信仰を通して、じっと見た。すると、見える世界が変わってきた。小さいもの、無意味なもの、無力なものに、神様の恵みがあふれていることを、パウロは見出した。

障碍=障礙という言葉は、とても大切な意味を持った言葉だと思います。「障」=躓きや愚かさがあったとき、そこで立ち止まって、じっと見る。そのとき、私たちの社会の矛盾がはっきりと見えてくる。だから、私は少し大胆に、こう考えています。「障碍者」と呼ばれる方々は、身を挺して、私たちの社会の矛盾を照らし出す大切な役割を、担ってくださっているのではないか。その照らし出す明かりの中で、私たちは、自分たちがどうしてこんなに生き難いのか、気づかせていただけるのではないか。

以上のことを踏まえたうえで、私は、もう一度この会のタイトルを見直してみたいと思います。それは「「障害者」合同交流セミナー」となっています。ここに「障害者」となっていることに、私は、もう一つの大切な意味を見出したいと思います。

新約聖書を紐解き、パウロの言葉を手繰るとき、私たちは、小さいもの、弱いもの、見栄えのしないものに神様の恵みがあふれている、ということを知ります。あるいは、イエスの生涯を振り返るとき、打ち捨てられたと思われる人々に注がれる限りない愛情が私たちの胸を打つのです。そのことを知った後、私たちは自分の生きている世間を見回して、がっかりします。なんということでしょう。世の中では、五体満足であることが「当然」で「普通」とされ、心身に不具合があることを「異常」とし、それを忌避し、時にそれを蔑んでいる。多数派を占める「健常者」の都合ですべてが決まり、少数派は無視されている。多くの人が金持ちにあこがれて、貧しい人が蔑まれている。権力者が魅力的だと思われて、無力であることは恥ずべきこととされている。そして結局、そうした常識のために、私たち自身が生き難くなっている。心身に不具合があったり、経済的に困窮していたり、国籍や性別において少数者であることが、「害悪」とみなされる世間。その世間に巻き込まれて生きている私たち。その世間を正すことができない自分。むしろ、その世間の中で恩恵を受けて安住している私。そして、その世間のせいで、息苦しさを感じている私たち。

そして、私は気づくのです。「障害者」という言葉を、心身に不自由を抱えておられる方々が、お使いになっている、と！——そのとき、「健常者」であるらしい私の眠った良心が、激しく揺さぶられ、呼び覚まされるような気がしてきます。この会場に、大きな文字で「障害者」という字がある！ このことが、強い道徳的力を発揮しているように思うのです。

心身に不自由がある人に、何の「害悪」も、あるはずがない。それなのに、世の中が、その人々を「害ある者」と呼ぶ。その現実の厳然とあることに、はっとし、ぞっとします。そして、「障害者」と不当にも呼ばれることに耐え、そのことをとりあえず赦し、ぼんやりし

ている私の良心を目覚めさせようと体を張ってくださるかのようによやかにここにおられる方々のお顔を見る。そうして、まだ和解の可能性が残されているということに、小さくても確固とした希望を感じます。その大きな意味を、今、この『『障害者』合同交流セミナー』という文字に読み取りたいと思うのです。

心身の不自由と共に生きる人々は、「害」をつけて呼ばれる理由のない人々です。むしろ、聖書に従うならば、不自由のなかに神様の恵みと愛のある、そのことを体現されておられる方々です。しかしその方々が、「障害者」という言葉で呼ばれる。ここに深い闇のようなものを感じます。実に、「障害者」という言葉には、社会の矛盾が凝縮されている。そして、その社会の矛盾を引き受け、淡々と今日を生きておられる方々がおられる。その身を張って、世の中の矛盾を静かに示しておられる。その姿を見るたびに、私は、「十字架のキリスト」と「復活のイエス」を思い出します。

「十字架のキリスト」と「復活のイエス」を区別し、関係づけ、順序付けることが、キリスト教の理解において、とても大切だと、私は思っています。

「もう人間ですらない」というような苦しみの極限の中には、神様が共にいてくださる、ということ。それを示すのが「十字架のキリスト」です。それは、共に苦しんでくださる神の救いを語るものです。

「すでに死は命に飲まれたのだ」ということが私たち一人ひとりに新しく知らされるということ。それを示すのが「復活のイエス」です。それは、どんな死も、もはや必然ではない、という神の正義を、私たちのために語るものです。

世界の矛盾を引き受けて、苦しむ人々と苦しみを共にすること。そのことが、すべての苦しむ人の足元に、しっかり立つための足場を築きます。そして足場が定まれば、矛盾はいつか必ず解消されると信じて粘り強く一歩ずつ筋を通してゆくこともできる。「共に」いることが人を救い、そして、その人の「為に」何かが始まる。その行き着く先は、きっと、和解だと思えます。苦しむ人自身が、ご自分の人生と和解し、自分の過去と和解し、自分の生きる世界と和解する。それは筋の通った平和を生み出す。

「十字架のキリスト」が足場を据え、「復活のイエス」が目標を示し、そして和解が生まれて行く。『『障害者』合同交流セミナー』という言葉の中を見ながら、私はそのことを思い出しています。不当にも「障害者」と呼ばれている人々のゆるしを得て、不当にも「障害者」と呼び習わしてしまっている私が、ここに共にいさせていただける。その深い安心感に支えられて、この不当な社会の矛盾を見据え、それを克服する道をご一緒に歩む。そうした決意が、「『障害者』合同交流セミナー」という言葉に、見えてくると思うのです。

以上申し上げたような事柄を基調として、以下、『『障害者』と災害』についてお話を進めてまいりましょう。

1. 津波被災地の外国人

それでは、『『障害者』と災害』の話題として、まず津波被災地のお話をいたします。ただ、

津波被災地と「障害者」の話題については、この後のパネルディスカッションで、秋山善久牧師がお話しくださいます。それで、私はそこにつながることを、外国人被災者のお話をしたいと思います。

そのために、私たちの活動の紹介を簡単にいたします。

2011年3月11日、全世界での観測史上最大の地震が、太平洋で起こりました。それは巨大な津波を生み出します。津波は、場所によっては20メートル以上の高さとなり、秒速8メートルものスピードで、2000キロに及ぶ海岸線に迫りました。津波の本当の恐ろしさは、水そのものよりも、水が押し流す瓦礫にありました。渦を巻きながら押し寄せる津波は、家や自動車や防波堤や防砂林を、すさまじい勢いで破壊しつつ押し流し、凶器に変えたのです。やや内陸部の津波被災現場では、家々の一階が穴だらけとなりました。それは、流れ込んだ流木や自動車によって、一階の壁が破壊されていったからです。多くの瓦礫は、高速道路のために作られた土手で止まりました。土手の海側は、あらゆる種類の瓦礫に覆われたのです。そのなかには、もちろん、1500にもおよぶ遺体も、混ざっていました。

翌日、原子力発電所が爆発事故を起こします。原子炉が溶けてしまったことは、すでに爆発の前から、東京電力株式会社の中で、分かっていました。しかし、爆発が起こった後になってもまだ、真実は報道されませんでした。そして、真実を知っている一部の人々だけが、静かに遠くへ逃げていきました。ジャーナリストや東京電力株式会社の関係者がそのときに取った行動について、情報がないままに取り残され被曝した人々は、今でも、口々に語り合っています。私はその悔しさを、何度も直接、聞いてきました。

3日後の月曜日、被災地域の中心都市である仙台市で、一つの葬儀が行われました。津波被災地にあったカトリック塩釜教会へ向かう途中に命を落とした、アンドレイ・ラシャペル神父の葬儀でした。ラシャペル神父は、仙台キリスト教連合の世話人でした。その葬儀に参列した仙台キリスト教連合の世話人の間に「何かしなければならぬ」という思いが強く与えられました。そして、仙台キリスト教連合の「全体会」が招集されます。招集は、震災の一週間後、3月18日の夜とされました。

その日、3月18日の日中、私は、妻と話し合っていました。原発が爆発事故を起こしたことは、もうわかっていました。政府が信用できないということも、よくわかっていました。それで、遠くへ避難しようかと、私たち夫婦は話し合っていたのです。しかしそのとき、私は大学で自分が学生たちに教えてきたことを思い出して、こう言いました。「自分は、千人以上の大学生に、“大切なことは、ただ生きるのではなく、よく生きることだ”と語ってきた。今、自分たちが安全を求めてここを離れることは、学生たちに対する裏切りではないか」。私たちの娘は、まだ1歳と6歳でした。それでも、妻は、この被災地にとどまろうと言ってくれました。

そして、私はその夜、招集された「全体会」に出席します。そこには仙台中の教会関係者と、そして世界から来た支援団体の責任者が集まっていました。そこで、支援団体の責任者は仙台キリスト教連合に、支援事務所の設置を求めました。仙台キリスト教連合はその要請

を受諾し、そして私ともう一人の若い牧師を事務局担当者として任命したのです。そうして発足したのが「東北ヘルプ」でした。

それからの日々は、本当に驚くことばかりが起きました。私たちは、「神様のなさることを邪魔しない」と言い交し合いました。たくさんの方々が私たちに助力を求めてくださいました。助力を必要としていた私たちに！です。弱さが、力となりました。強さは、ほとんど役に立たなかった。強さは、ただ、弱さの中でだけ、役に立った。そんな不思議なことがたくさんありました。

そうした中で、在日大韓基督教会の方々がお越しになり、「外国人被災支援プロジェクト」を行いたいと申し出てくださいました。日本キリスト教協議会が世界の諸教会とつながり、現地の研究者や人権活動家と日本キリスト教協議会を東北ヘルプがつなぐ、という形で、プロジェクトは2年間の活動を進めました。仮設住宅を一軒一軒回り、外国人の状況調査をして、そのプロジェクトは進んだのです。その際、行く先々で、「キリストさん」と呼ばれ歓迎されたこと、そして「キリストはすごい」と被災者のお一人お一人が言ってくださったことは、大きな驚きでした。なぜなら、その人々はこれまでに一度も教会に行ったことのない人々ばかりであり、その地域にはこれまで一度も教会が建ったこともなかったからです。キリスト者は、確かに、津波被災地で愛のあかしを立て、そしてキリストの名前が高い評価を獲得していた。それは驚くべき出来事でした。

さて、外国人被災者支援プロジェクトです。状況調査から始まり、日本語教室を開校し、個別の相談事業を進めました。その詳しい内容はすでに報告書にまとめられています。その思い出の中から、私は、『『障害者』と災害』というテーマに関係することとして、二つのことを申し上げたいと思います。

一つは、災害は隠されていた外国人を浮かび上がらせた、ということでした。私たちは、外国人を「外国にルーツを持つ人」と定義しました。なぜなら、地震と津波の被災地となった東北において、外国人の多くは「花嫁」として日本にやってきて、日本国籍を取り、そして「主婦」として生活をしてきたからでした。その背後には農家の「花嫁不足」がありました。家事と介護と出産のために、女性たちがアジアからやってきていたのです。やってくる際には、ブローカーと呼ばれる人々が介在していました。その実態を知ったある米国人女性は「人身売買ではないか」と憤った、そうした現実が、外国人被災者の現実でした。

ですから、震災前まで、「外国人」は“いない”ように思われていたのです。彼女たちはほとんど家から出ることもなく、多くの場合は日本語の勉強もしていませんでした。外見上は日本人と変わらないように見えるアジアの女性たちです。周囲の人々は彼女たちを「外国人」とは思わなかった。

そして、大地震があり、津波がありました。言葉も不自由な彼女たちは、情報の不足に苦しみました。そして、今更ながらに、自分たちが外国人であることを思い知らされました。危機に際して何を大切にするか、をめぐり、フィリピン人と中国人と韓国人と日本人の間には、おのずと違いがあったのです。同様に、彼女たちの周囲も、彼女たちが外国人であるこ

とに、突然、気づかされることになりました。彼女たちに子供が生まれていた場合、その子供を連れて母国に戻ってしまうのではないかと疑った家族が、何人もいました。避難所では、近所の人々が、彼女が「外国人」であったことを初めて知って驚いた、というケースがたくさんありました。

震災は、隠れていた少数者を、急に突然、浮かび上がらせるのです。そのとき、少数者と共に生きる人が求められる。そうした人がいなければ、少数者であることが急に露呈した外国人は、本当に、孤立し追いつめられる。このことは、障害者にもそのまま当てはまることだと思います。

もう一つ、重要なことを思い出します。それは、支援とはだれが主体となって行われるかということです。

震災から数年が経ったあと、仙台市内のある大学で、シンポジウムが行われました。そのシンポジウムには、外国人の被災当事者が登壇していました。その人々は口々に、自分たちを外国人と呼ばないでほしい、と語っていました。自分たちは土地の人々の一人となっていた。それなのに、支援を受ける者となり、外国人となってしまった！という訴えがなされていたのです。

私は、「同化」をめぐる私たちの社会の所業を思い出して、良心の呵責を覚えるものです。実に多くの外国人が、「同化しろ」という無言の圧力にさらされ、自分自身の個性を無視され、尊厳を傷つけられています。そうして痛めつけ続けられている友人の痛みを、私は日本人の一員である自分自身の罪責の結果と思い、深く恥じるものです。

しかし、そのシンポジウムは大切なことを私に訴えてきます。支援は、誰のためのものであるか、ということです。まず、痛む人と共に生き、その人の息遣いを知り、その人の必要を知って、それから初めて、その人のためにできることを探すこと。そうしないと、あるいは「あなたは外国人なんだから」と、親切と正義を押し付けることで、却って苦しみを増やす危険がある。そのことを、私は学んだ気がしています。このこともまた、外国人だけではなく、障害者にも当てはまることでしょう。まず共に生きること。そして、その人のためにできることを探すこと。この順序が、支援ということを考えるとき、とても大切なのだと思います。そのことを、災害の現場で、私は学んだのでした。

2. 原子力災害被災地の今

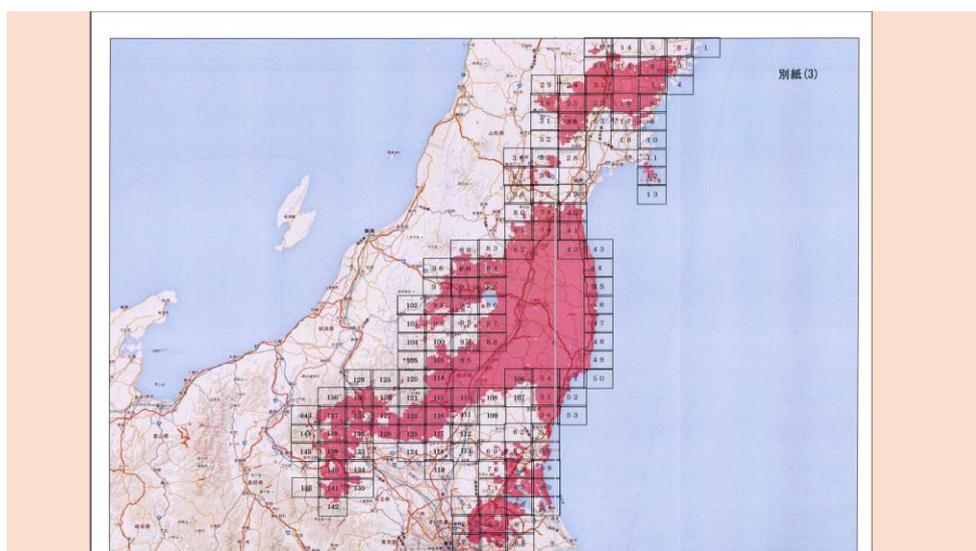
次に、原子力災害の被災地で学んだことについて、『障害者』と災害』というテーマで、お話をいたします。

原子力災害は、今、深刻さを増していると思います。最初から現実をしっかりと見据えて、できる手立てを一つずつ打っていれば、多くのことが避けられたはずでした。しかしそれができていない。その結果、原子力災害の第二段階が、いま、起こりつつあるように思うのです。

日本政府と米国政府の発表によれば、原子力発電所から100キロ以上離れた仙台市で、2011年3月からの2か月程度で、放射性ヨウ素は最低でも270億ベクレルが降り注ぎ、成人男性で甲状腺への被ばくは12ミリ Sv と推計されるそうです。私の娘たちは、その中を生活しました。米国の専門家から直接伺ったところによると、広島・長崎の原爆の影響を長年にわたって調べた結果、女兒は成人男性の10倍、被爆してしまうとのこと。ということは、私は、自分の二人の娘に、270億ベクレル以上の放射性ヨウ素が降り注ぐ中を生活させ、120ミリ Sv の被ばくをさせてしまった。この被ばく量は、国際的な年間被ばく許容限度の120倍となります。そして、私の娘たちは、甲状腺に嚢胞が出てきました。気が付くと、下の娘は鼻血を連日出し、上の娘は頭痛を訴え続け、顔色が悪く、やせていました。2014年夏、原子炉の中の核燃料が気化して放出されている可能性が高いことが報道されました。そのことをきっかけに、私たちは、2015年春、妻と娘二人を沖縄へ転居させました。すると、下の娘の鼻血は出なくなり、上の娘の血色はよくなって頭痛もやんでしまいました。

私はいったい何をしてしまったのでしょうか。古の哲人の言葉を借りて格好をつけ、子供たちを被ばくさせ、いまさらながら、避難させた。なんと愚かなことなのでしょう。

実は、私のような思いを抱く母親たちが、本当に大勢います。2016年2月に、一つの資料が公にされました。それは、2012年末の汚染状況を示す地図でした。それは、日本政府が計測したデータを、子どもを守るためのNGOが編集し、裁判所が証拠として認定したものです。その地図資料は、2012年末段階でも、福島県を含む東日本の膨大な地域が「安全とは言えない」状況にあると示しています。東京都の東側まで、「安全とは言えない」。その中で、人々は放射能という言葉も忘れて生活していた。そして、何百人もの人々が体調に異変を確認した。しかし、何の根本的な対応も取られていないように感じる。——これが、放射能被災地の現在です。



私は、暗澹たる思いを胸に、世界中に私たちの新しい罪責を告白しなければならないと思っています。「安全とは言えない」地域がどこなのか、についての2012年末の状況報告が、2016年2月になって、やっとできた。その間も「インバウンド」ということを言って、私たちは海外の人々をどんどんと呼び込んでしまった。これは、罪悪です。できる限りの努力を尽くして現実を知らせ、そのうえで、お越しいただかなければならない。しかし、そうできないでいる。私たち日本人は、今、深く恥じて灰をかぶり懺悔して祈るべきだと思います。

今、原子力被災地には、和解が必要です。後悔と憎しみに溢れる被災地に、和解が必要なのです。自分自身の判断の愚かさを悔やみ、子供を守れなかった自分の弱さを責め、言いしれない憎しみを、東京電力をはじめとする世間の無責任さに向けている。それが、原子力災害の被災地の現実です。そしてその苦しみは、どこまでも少数者の苦しみです。日本全体で見れば、原子力災害の被害者の数は、圧倒的に少数である。だから、その後悔と自責と憎悪の呻きは、どこまでも無視され、あるいは押しつぶされている。

判断の愚かさ、親としての弱さが、周囲への激しい憎しみを生み出しています。愚かさ、と弱さの中に、神様の恵みが宿るのだと、そう言える信仰が、私たちにあるかどうか。子供たちが犠牲になっています。その苦しみの中に、神様が一緒にいてくださると、そう信じていることができるかどうか。今、「十字架のキリスト」の救いが本当に私たちのものとなっているかどうか、が問われています。

そして同時に、この異様な事態はほどなく終わるのだと、本当にそう信じて前を向けるのかどうか、問われています。どんな死も病も苦しみも、命に飲み込まれているのだと信じていることができるかどうか、問われています。「復活のイエス」と出会って生きているのかどうか、キリスト者は一人ひとり、いま、問われています。

私はここで、慎重に立ち止まり、自分の在り方を点検しなければなりません。

もし「十字架のキリスト」だけを語り、苦しみの中に共にいてくださる神だけを語るならば、「だからしょうがない、我慢しよう」という結論に落ち込むように思います。深い絶望が、薄く広く、原子力被災地を覆っているように思うのです。その絶望の力に加担してはいけません。

また逆に、もし「復活のイエス」だけを語り、「十字架のキリスト」を語り忘れてしまうなら、神の正義を無遠慮に語りだすでしょう。そのとき、拙速な解決策を押し付けて被災者を再び三度と、傷つける残酷が起こると思います。苦しみの中にある人々を、「そんなところに子供を置いて被ばくさせるなんて！」という言葉が、今、襲っています。それはその人自身の内側から聞こえる後悔の声であり、そして被災地の外側から聞こえる善意の声なのです。思いやりを失った善意によって人を傷つけることほど、残酷なことはないと思います。

だから私たちは、いま、無力の中に新しい神様の業が始まることを、本気で信じたいと思うのです。愚かさを包み「それでいい」と宣言してくださる神様の声を、聴きたいと思うのです。諍う人々の間に立って、その憎しみと保身の刃を自らに引き受けたイエスが復活して今日もお働きになっているという、聖書の宣託に、賭けてみたいと思うのです。そのイエス

の復活の力は、どんな絶望をも吹き飛ばすと、そう信じてみたいのです。

結：福島ろう恵み教会・東日本大震災国際会議・世界教会協議会

2016年3月28日、私は、福島県福島市にいました。そこは、少し前まで、スイッチの入ったガイガーカウンターを持って歩いてはいけなかったところでした。なぜなら、多くの人が「普通に」暮らす道路や公園や学校で、放射線量が危険水域に達していることを知らせる警報が、ずっと鳴りやまないからです。うるさいので、そうした警報音は、切らなければならぬ。行政が設置した、いつも低い数値を示すように工夫されたガイガーカウンターを見て、そして安心だと言い交わしながら、生活しなければならない。それが、30万人以上が住む大都市福島市でした。



2016年3月28日に私が訪問したのは、福島市内中心部にある「はれるや福島伝道所」でした。この伝道所は2010年に設置され、今まさに「福島ろう恵み教会」として再スタートしようとしているところでした。地震の恐怖の中で、避難所に行くことも憚られ、自動車の中で生活することを余儀なくされた、聴覚に不自由がある人々の教会でした。しかしその苦難の中でも、小澤牧師が福音を語り、そしてみな集まって共に礼拝をささげることで、神様の平安の内を歩んでこられた教会でした。「イエス様を信じるという大切なこと、聖書を学ぶという根本的なこと」を大切にしてきたと、小澤牧師は、手話でお話になりました。



丁寧にお話を伺って、はっきりわかったことは、私の心を重くしました。この教会に集う10数名の方々は、政府とテレビが発表する情報以外に、原子力災害について何も聞いていないということでした。福島市は原発から50キロ以上離れているから大丈夫、と、真顔でお話されていました。私は、ためらいがちに、少なくとも原発事故のあとの数年は、福島市内の全域にわたって、非常に高い放射線が確認されていたことをお伝えしました。ただし、大切なことは、被災者が自分で決めるということであり、そのために情報が必要であればお

渡ししたいと思っていると、お伝えしたのです。

津波の被害の中で、多くの外国人が、情報が手に入らずに困ったと、言っておられました。今、同じことが、原子力災害の被災地で起こっているのかもしれませんが。

福島での会議の最後、私は、日本と韓国の教会の皆さんに伝えたい事、助けてほしいことはありますか、と聞きました。教会員のお一人は、「今起こっていること、私たちが経験したことをきちんと知ってほしい」とお答えになりました。そして、それ以外には特に何もないと、そうおっしゃいました。

その最後に、おひとりの方がこう言いました。「今、支援ということを語る時、“自助” “互助” “公助” ということが語られているそうですね。それを引き取って、私はこう言いました。

まず、「公助」という言葉には、トリックがあります。この言葉は、もともと「官助」と言っていたもので、1995年の阪神淡路大震災の時に使われたものでした。それはつまり、「行政の役人が担うべき援助」のことだったそうです。でも、それを、日本政府が「公助」と言い換えた。「役人の担う援助」こそ「公の援助だ」という言い換えがなされた。そのことによって、役所の責任があいまいになった。実はこのことが、たくさんの方の行違いを生むこととなります。

役人は、「役を担う人」ですから、「役」をする時間が決まっています。定時には、帰る。ですから、勝手に「役」を増やすことはできない。だから、限界があります。その限界の中で最善を尽くすのが「役人」です。でも、その「役人」が「公」を名乗ってしまうと、「なんでもできる」ような錯覚が生まれる。そこには、怒りや苛立ちが、当然、生まれるわけです。だから、「公助」という言葉は、気を付けて使ったほうがいいでしょう。それはあくまでも「官助＝役人の援助」であり、いつも限界がある。

だから、「互助」と「自助」が大切になります。「互助」が「自助」を生み、「自助」が「互助」を生む。本当は、そうやって人間は生きている。それが確保されなければならないと思う。

以上のように、私は申し上げますと、そこにいたすべての人が、納得してくださいました。そうして、私のこの日の訪問は終わったのです。

「自助」と「互助」が折り合わさって行くこと。それが大事です。でも、これは難しいことです。

「互助」は、ときどき、「おせっかい」になります。善意が人を傷つけることがある。善意によって傷つけられたとき、その痛みはとてもひどいものとなります。

そして「自助」は、しばしば、無理です。どうにもならないから、援助が必要なのです。それは障害者や外国人に限らないでしょう。原子力災害の巨大さを前にして、私たちの社会は茫然としているように見えます。ものすごい力を持っているはずの政府ですら、どうにもならない、という様子です。

ではどうするか。ここで大事なことは、「無力」の力を確認することです。「互助」が必要

なのに、うまくかみ合わない。それは、助けたいと思う人が、自分の力に頼るから、そうなるのです。助けてもらう側の無力が、助ける側の力を、意味あるものとするのです。その無力に頼らなければならない。実は、「互助」というのは、助けてもらう側の人々が、助ける側の人々を受け入れることによって、始まるのです。受け入れていただいて初めて、支援者は支援ができる。支援の現場で、私たちがしばしば驚かされることがあります。それは、まず支援される側の人々が胸襟を開いて無力をさらし、よそ者を受け入れ、しばしば無神経で無礼なふるまいをする支援者を赦してくださる、ということです。無力をさらけ出し、人間の本当の姿を示して、そのうえで、世界と他人を赦す、被災者の方々。そこに私は、ある種の力強さを感じざるを得ません。でもその力強さは、能力や権力や経済力とは違う種類の強さです。それは一体なんであるか。それこそ、「無力の力」だと思います。その力とは、ゆるされてあるということからくる力です。無力をさらけ出している、ということはつまり、そのままゆるされてあることを前提にしています。自分は神様とともにいるということ。何もできないところに、神様は一緒にいてくださるということ。そうしてゆるされてあること。このことをぼかしたり妨げしないこと。「ゆるされてある」という不思議を邪魔しないこと。そこに、どんな力とも違う、不思議でしなやかで大きな力が現れるのだと思います。それが、「無力の力」だと思うのです。

この力を前提として、無力なままに、他人と世界とをゆるし、受け入れる。そういうことがあって初めて、「互助」は動き出します。

受け入れていただいた支援者は、自分が無力であることを知らされます。そして、受け入れていただいたという事実気付く。自分がゆるされてあることを知る。そうして初めて、支援者の支援は「善意の押し付け」でない、意味あるものとなる。

「互助」とは、支援する人と支援される人が、それぞれ自分自身の無力を示し合いながら、無力を接点に繋がり合い、螺旋状に組みあがっていくものなのです。それは、私たちキリスト者の立場から言えば、それは、神様のゆるしに支えられて、他人と世界の限界をゆるしてあって組みあがる和解の業に他なりません。

この組み合わせを具現化しようとしている運動が、世界の教会の中に、ありました。その運動はまだ続いています。そのことを最後に申し上げて、私のお話を終わりたいと思います。

2011年の原発事故を受けて、世界の教会は動き出しました。すでに世界教会協議会は真剣な議論を60年以上にわたって積み上げてきたのです。その大きな進展を、この痛ましい事故を契機に、達成しなければならない。そうした熱い思いが、特に韓国の諸教会から寄せられました。その愛と友情を私は忘れることができません。

その思いは、2013年の世界教会協議会第十回釜山総会へと結集してゆきました。それは翌年に仙台で持たれた日本基督教団東日本大震災国際会議へと引き継がれ、そして2014年にジュネーブで持たれた世界教会協議会中央委員会へと引き継がれてゆきます。

その運動は、二つの文書を残しました。一つは、日本基督教団東日本大震災国際会議「宣言文」であり、もう一つは世界教会協議会の「声明：核から解放された世界へ」です。

「声明：核から解放された世界へ」は、世界中に広がる被曝者の声に耳を傾け、その声に聴き、そして活動を始めよう、と語るものでした。苦しむ者と共にいます神様の後を追うようにして、私たちは神の業に参加する。そうした思いが、この声明には込められています。

この二つの文書が発表された後、世界教会協議会は総幹事を仙台に派遣しました。そのとき、総幹事が私に言った言葉は、重要なものであったと思います。世界教会協議会の総幹事はこう言いました。「Local Initiative, Global Response」。被災者が動き、そして、世界は応答する。それは、苦しみの中に共にいてくださる神の声を聴き、そして、死を飲み込んだ命の主の呼びかけに答えようとするのだと思います。「十字架のキリスト」の救いに支えられ、「復活のイエス」と共に、被災者の為に活動する。そういうことだと思うのです。そしてそれは、一地方の小さな働きの中で「弱さの力」が起動し、それが世界規模の応答を呼び覚ます、ということだと思うのです。



今ここで、私は、福島ろう恵み教会が、皆さんにお願いしたいこととおっしゃった事柄を思い出します。それは、「この被災地で起こったことを知ってほしい」ということでした。それは、神様がこの苦しみの中で何をしておられるかを知ってほしい、ということだと思います。弱さの中で働かれる主の業を、この被災地で、皆様が確かに見、そしてそれをあかしして下さって、新しい祈りが日韓の教会に大きく沸き上がりますことを祈念して、この基調講演を終わりたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。